

Salamander
in
the circle

第十五章
ふたつの北極星

峯村 明

Salamander in the circle

登場人物

オモイカネ・・・・・・・・世界の果ての島の王に仕える者・王の左大臣
スクナ・・・・・・・・・・・・・ // ・・・・・・・・・オモイカネのおじ
フツヌシ・・・・・・・・・・・・・ // ・・・・・・・・・将軍
ミカツチ・・・・・・・・・・・・・ //
アマセオ・・・・・・・・・・・・・シトリ族の者
カガセオ・・・・・・・・・・・・・アマセオの弟
ヤサカオ・・・・・・・・・・・・・アマセオの旧友
タマシギ・・・・・・・・・・・・・シトリ族の者
ホシナ・・・・・・・・・・・・・ホシナ族の族長
オマキ・・・・・・・・・・・・・ホシナの妻
ミツハ・・・・・・・・・・・・・メッサナからの亡命者　メルノの偽名

これまでの主な登場人物

ダーヴェ・・・・・・・・・・・・・ネウトラ評議会・学術調査団の団長
ヒューダー・・・・・・・・・・・・・ // ・・・・・・・・・団員
ヤスウ・・・・・・・・・・・・・ // ・・・・・・・・・団員
ハイヤーン・・・・・・・・・・・・・ネウトラ評議会・本部科学者のリーダー
テイコ・・・・・・・・・・・・・ // ・・・・・・・・・科学者
パウル・・・・・・・・・・・・・ケストル王国・国王
ウルリク・・・・・・・・・・・・・ // ・・・・・・・・・第三王子

ヘンリック・・・・・・・・・・ // ・ヘンリックの息子
ソルド・・・・・・・・・・ // ・警備隊長
バイスロイ・・・・・・・・・・黄金門の皇帝の息子
パンテオラ・・・・・・・・・・メッサナ市の総督
コモラ・・・・・・・・・・メッサナ総督の顧問
バラム&バランケ・・パンテオラの部下 双子のジャガー
パルダリス・・・・・・・・・・メッサナ市の総督家の一人。総督代理
メンドルプ・・・・・・・・・・メッサナの化学者
レル・・・・・・・・・・エウメロス王国・王室付き近衛隊長
ヘルガ・・・・・・・・・・ // ・王女
コタエ・・・・・・・・・・世界の果ての島の王に仕える女官
サノヒコ・・・・・・・・・・ // 役人
チドリ・・・・・・・・・・シトリ族アマセオの妻
ハマツ・・・・・・・・・・チドリの父
キト・コマ・・・・・・・・・・ホシナ族の男たち
マミヤ・・・・・・・・・・ホシナ族の娘
イリチャ・・・・・・・・・・火の精霊
ベネトナシュ・・・・・・・・・・死神

目次

ふたつの北極星

237.

238.

239.

240.

241.

242.

243.

244.

245.

246.

247.

248.

249.

250.

251.

第十五章のあとがき

奥付

ふたつの北極星

237.

ミツハは直観した。私の子！ 名を奪われ、取り上げられたわが子だ！ しかしヒューダーという男が名をつけたのだという。イリチャという名を。

いつもはおだやかなミツハの意識が夢見るように揺らぐのをメルノは感じる。
(イリチャ——とうに滅びた古い国の言葉。その国の王家の紋章。槍という意味の。ヒューダーという人はそんなことを知っていたというの？ いいえ、知らなければそんな古い言葉は出てこないはず。ああ、いったいどんな人なのかしら。ひとめでいいからお会いしたい。会って……そう、わが子に名をつけてくれたことに感謝を……)

その思いがかなうのは、遥かに遥かに後の世のことである。

ミツハの心が揺らぐのと同時にメルノの心も揺らぐ。ホシナの娘マミヤは、ミツハの子にいざなわれて南へ向かったという。ケストル・エウメロス両王国国境地帯から南といえば——メッサナの方角ではないか！ 懐かしい故郷でありながら屈辱と恐怖の代名詞となってしまったその響きを、メルノは心から締め出したかった。

けれども……

「そうだそうだ、思い出した！ ミツハ、そなたを助けたヤスウという男、彼もまたそのヒューダーを探しに行ったのだった！」

マミヤもイリチャも、ヤスウも、ヒューダーあるいはメッサナを目指しているという

のだ。

「スクナさま……『かの地』で、なにが起こっているのですか？」

「なにかとてつもなくおぞましいことだ。実は、海のかなたではダイドラボッチを狂暴化させたような巨人族があちこちで暴れている。ヤスウらはその大元がかの、メッサナというところにあるのではないかと踏んだのだな。いや、なにが起こっているのか私も知りたいのだ。そこはいったいどういう土地なのだ」

尋ねたのはメルノだったがミツハは答えを知っていた。 悪夢。冥界への入り口。

238.

ホシナ族の生活環境はひじょうに質素である。天幕はシカの皮、支柱は森から切り出してきた木の棒。植物の蔓。どれもいかようにも再利用できるものばかりだ。ホシナの天幕は解体され、今は担架に姿を変えている。自力で動けないカガセオを運ぶためであった。ただの織物にみえるそれはどういうわけかえらく重量があって大の男が四人がかりで運んでいる。力仕事を買ってでたのはヤサカオ族出身の若い衆だった。

オモイカネが見たら、目を剥くだろうなあ、スクナはそう思う。ホシナ族といい、ヤサカオ族といい、織物カガセオになんのためらいもなく手を触れる。触れてショックを受ける者もいなければ気絶する者もない。どういうわけだろうとスクナは首をひねる。

(信用できる相手には好きに触らせるが、そうでないやつには噛みつくってことか?)
スクナは知る由もないが、メッサナのジャガーが総督やヒューダーに懐いていたのと同

じ構図だったのだ。

(ということは……) カガセオとオモイカネとは、顔を合わせれば陰悪な稲妻が走るような間柄、いってみれば、犬猿の仲、なのだ。

(澄まし屋のオモイカネが目を剥くところも見たいが)

子供の頃のオモイカネは蜘蛛が苦手で、大きいのはもちろん、よくよく目をこらさなければ見えないような小さいもの的確に見つけ、絹を引き裂く悲鳴をあげて大騒ぎしたものである。そして、この種類はいつの季節に現れ、どういう場所に巣を張り、あるいは張らず、何を餌にしている、とやたら詳しく、だから、この季節にそういった場所には近づかない、と徹底していた。苦手なものを観察しているうちに生態に通じてしまったわけである。そして運悪く遭遇してしまった暁にはお付きの者が脱兎のごとく駆けつけ、宿敵を退治するのだった。

(ようするに) スクナはやれやれといった風にため息をつく。(怖がりなんだよな)

(澄まし屋のオモイカネが目を剥くところも見たいが、しかしそれは、全力で反撃してくるってことじゃあねえか!?)

ホシナ族はキャンプを撤去して山の中を逃走中だが、動けないカガセオが一緒だ。オモイカネのことだから容易に標的を見つけ出すにちがいない。

(さあどうする) ホシナ族逃走の援護は部下に任せて、自分はオモイカネを足止めするか。

239.

八連山の東側の深い山と谷の中を行くフツヌシの軍を濃い霧が包んでいた。方角を知ろうにも空が見えない。

ぼんやりとした薄明の向こうから、幼子の泣き声が、若い女のすすり泣きが聞こえてくる。まことに女子どもが道に迷って困っているやもしれず。ひとりの兵士が隊列を外れ、声のする方へとそろそろと歩を進める。と、兵士は絶叫をあげ、その姿は霧の奥へと吸い込まれる。彼らは狭い尾根にいたのだ。尾根道を踏み外せば、谷の底への転落が始まる。

いつの間にこんな場所へ来てしまったのか。頭をひねっても始まらない。後方はすでに霧の中、前に続く一本道しかないのだから。そして霧の向こうでは絶え間なく幼児と女が泣いている。それは屈強の兵士たちの士気を著しく、くじくのだった。

フツヌシの軍はいくつかの分団に分かれていたが、一つはモノノケに惑わされて山中で行方知れずになり、また一つはヒグマと鉢合わせして全滅し、一つは猛烈な勢いで伸びてくる蔓草と木々の枝に行く手を阻まれた。それでも霧中を誘導された精鋭たちが決戦の地へと集結しつつあった。

ヤサカオ族の若者らの先頭に立ってフツヌシの到着を待つのは、戦装束に身を固めたアマセオである。

*

すまないが族長どのを呼んでくれぬか、とカガセオは傍らに寄り添っていた壮年の女に頼んだ。女は屈託なくうなずき、しんがりを歩くホシナのもとへ向かった。カガセオがアマセオの身内であると知った族の者たちにとって、彼はもはや自分らの身内も同然だった。

「どうされた、カガセオどの」

「戦いが始まる。兄者が敵将と相まみえている」

「おぬし——そんなことまでわかるのか」若干、息をのんでホシナは尋ねた。

「兄者のことならなんでも。伊達にいっしょに生まれてはおらぬ。兄者は戦いを避ける道はないものか考えていた。しかし……ヤサカオ族の領地のふもとに村があるだろう」いやな予感とともにホシナは無理やり声を落とした。（ある。オマキはあそこの村の出身だが……それがどうしたのだ！？）

「山賊の集団が侵入した」

（な——なんだと——！！）

「住民は全員安全な場所へ移された後だった。安心されよ」

（山賊に襲われるまえに住民は安全な場所へ？ わけがわからんぞ、どういうことなのだ？）

「一瞬のことだったので私にもよくわからぬが、まるで神隠しのごとく住民全員が消え失せた。消えた住民は次の瞬間、広く整地された別の場所に現れた。おそらく瞬間移動だ。そして無人となった村に山賊が攻め入ったのだ」

（?????）

「山賊の集団はフツヌシ軍の偽装だ」

（えっ！）

「フツヌシ軍は村を占拠し、住民を人質にしようとしたのではないか。そのことを察知した者がいる。ひじょうに力のある者で、その者が村の住民を安全な場所へ移したのだ」

（それは……）ホシナはちらりと後方へ目をやった。（スクナどの？）

「いや、彼も大きな力の持ち主だが、彼ではない。おそらく……」カガセオは全部言わ

ずに話題を変えた。「兄者は戦いを避けられぬかと考えていたが、相手がこんなことを画策するのではな」

(あの村はただの、のどかな農村なのだ。そんな村を巻き込もうとするとは——！！)

「フツヌシとの戦いは避けられぬ。ふもとの農村を占拠したフツヌシは山賊を装ってホシナの郷にも侵入しようとしている。もはや後戻りはできぬぞ、族長どの」

その覚悟はとうにできているホシナである。彼は小休止を命じた。

故郷の村が襲われたのを知ってオマキは青ざめた。焦点はホシナ族なのだ。自分たちが今まさに追い詰められているのを、まざまざと実感せずにいられなかった。

そしてスクナも青ざめた。村人を救ったのは、まちがいない、オモイカネだ。

(なんでこの私が青ざめねばならんのだ！ 救ってもらったのだから喜ぶべきではないか！ しかし喜べない！ オモイカネのことだからなにか思惑があるはずだ！！ ああなんということだ、私の清い心が疑心暗鬼でいっぱいだ！！)

240.

草地に下ろされた担架のもとへミツハがやってきてカガセオをさすっている。手当をしているのだ。やがてカガセオは言った。

「族長どの、おかげで傷が癒えた。礼をいう」

「なんの。おお、起きられるか」

「うむ。族長どの、ホシナの方々、世話になった。私は行く」

「なんと！ 何処へ行かれるというのか！」

「むろん、兄者のもとへ。私も戦いに加わる」

「い、いや、しかしカガセオどの——」

「これは兄者とフツヌシの戦いでもある。そしてフツヌシの背後には恐るべき力、超常の存在が控えている」

——と、スクナは面をあげた。そしてどこを見るともなく視線を空へ。

(そうだ——死神が憑いたタマシギはフツヌシの側にいるのだった！　これは——この国そのものが死神に染まってしまうことを意味しないか！?)

(その通り)

その想念の波長はスクナ自身ではなかったのが彼は驚いた。それは女性の声音を持っていた。ミツハの声だ。

(スクナさまは、ご自分の心の中に疑心暗鬼が渦巻いているのを嘆いておられましたね。かつてなかったことゆえに)

(そう、そうなのだ。黒い渦だ、ぐるぐるずるずると引き込まれていくようなのだ。なんともいえない嫌な感じだ、こんなことは初めてだ！)

(これこそ、死神の持つ波長)

(おお——)

(疑いの気持ちはとても重く低いところで波打ちます。その波は容易に人を支配する。それが真実でないにも関わらず、人は容易にニセの真実に支配されてしまう。実際、メッサナでそういうことがきわめて大規模に起こりました。何者かが蒔いた種によって)

メルノは落ち着いていた。メッサナの記憶が喚起されることでパニックに陥ることはなかった。むしろ、漠然と、自分自身の経験はここで必要だったからではないのかとさえ、感じられていた。

(何者かとは——死神か)

ミツハはうなずく。(疑心暗鬼の種によって、人は容易に地に落ちる。そしてこの気

分は容易に伝播するのです。美しかった草原の花はあっという間に黒い花にとって代わり、実を結ぶ。死神の鎌はその果実を易々と刈り取る。彼は種を蒔くだけ。芽吹かせ、実を結ばせるのは他人、なにもせずに収穫だけを手に入れる。それが死神)

スクナはぞっとした。彼が生まれ育った国が今、死神の手に落ちようとしている――

(オモイカネさまは、敵ではありません)

(……そおかなあ。あいつは昔っからそういうめんどくさいやつなんだぞ。なんというか、疑心暗鬼にでもならんとこっちの身がもたんだ、自己防衛というやつだ) ミツハは軽く笑った。微笑ましい、という波動で。

二人の間のやりとりは一瞬のうちに行われた。

「これは兄者とフツヌシの戦いでもある。そしてフツヌシの背後には恐るべき力、超常の存在が控えている」、カガセオがそういう終えたところでミツハは口をはさんだ。

「カガセオさま」、と。「わたくしも、お供いたします」

241.

その申し出は、彼女のホシナ族との別れを意味していた。

少し前のスクナは彼女の同じ言動を叱り飛ばしていた。だが、一瞬の交感のあと、ミツハがあの時とは全く違う動機でそうしようとしていることがわかった。困難を避けるのではなく、戦おうとしているのだ。彼女はまるでちがう存在と化してしまったようだった。

それはミツハが使えなかったメルノの記憶とメルノが知らなかったミツハの能力との融合だった。ひとつはミツハがわが子の存在を身近に知ったことによって意識が一気に拡大したためだ。その拡大に恐怖に閉じこめられていたメルノの記憶が開放されたからだった。全身が澄んでいるとミツハメルノは感じていた。身も心も澄んで内側から力が湧き上がってくるようだ。

物静かに控えていた少女は今や堂々と立ち上がっていた。「行きましょう」彼女は澄んだ声で高らかに言った。「フツヌシの背後のモノを、打ち破るのです！」

カガセオとミツハが翡翠の色の光となって夜空に消えるのを、ホシナ族の人々はぼう然と見ていた。

「族長！ われわれも出立しよう！」スクナは声を張った。

「で、でもミツハちゃんは！？」

「ミツハにはミツハの役割があるのだ。みなを安全な地へ逃がすという役割がな」

242.

ヤサカオ族とフツヌシ軍の戦いは熾烈を極めた。ヤサカオ族は私兵とはいえ、先祖をたどればもとは武人、長らく続いた平和な世のあとに降ってわいた戦争に彼らは血を滾らせ、かたやフツヌシ軍は政府の正規軍である。兵士はこれまた名家の出ばかりだった。のだが。

実のところ、フツヌシ軍の兵士はこの戦いにどんな意味があるのかさっぱりわかっていなかった。表向きは、王の直轄地で権限外のことをしたホシナ族を討伐する、というものだったが、それは事実と反する、あるいは、でっち上げである、そんな噂がひそかに流れていたのだった。この国の食糧事情を……ことに冬季の……支えている伝説的な部族のことはみな、よく知っていた。それを討伐するとは。首をかしげる者が現れてもおかしくなかった。そして。

ホシナ族につき、その先頭に立っているアマセオという男はかつては彼らの仲間でもあった。アマセオは名門タカミムスビに連なるものだったし、性格は堅実で腕もたつたから、仲間内では信頼される存在だった。そんな男が何故討伐を受ける側の先頭に立っているのだ？

兵士たちの間に、おかしい、という空気が生じていた。それはある意味、疑心暗鬼の種だった。

世界の果ての緑の島は、神々が新しい人類を育てようとした、神々の温室だった。そこに異世界の植物の種がばら撒かれた。

かつて、住民同士の小競り合いは幾度かあった。だいたい食糧をめぐる争いだった。気候の急激な変化に植物性食糧の供給が追いつかず、王はついに外部のホシナ族を招き入れた。彼らは長いこと王との契約を厳格に守り、勤勉に働いた。その甲斐あって食糧は安定していき、住民同士のいさかいは激減した。

その一方で、王の周囲が不穏となる。後継者をめぐる内紛がおこったのである。王は己の後継者に、末っ子の第五王子を指名した。五人の王子のうち、第二、三、四の王子たちは末の弟の器量と人格、なにより王としての適性を認めていたので父の決定に従い弟の補佐に就くことに異論はなかった。問題は第一王子である。

彼は第三者の目から見ても、ありていにいって、王の跡を継ぐ器ではなかったのだが、母親が黙ってはいなかった。彼女の父は先代の王の兄。彼女にしてみれば現王は身分としては格下の従兄弟で、嫁いでやった、という意識が強かった。じっさい、彼女の方が十歳ほど年かさだったから、現王家が自分の支配下にあると思っていた。自分の子が王家を継ぐのは当然と思っていたのである。ところが……。みごとに思惑がはずれて彼女は怒り狂った。それ以前に彼女の妹が王宮内で臣下と不倫などをはたらいて現王の怒りと失望を買っていた。彼女らは内省することもなく、現王を呪い、第五王子の母にして正后である女性を呪った。

その凄まじい負のエネルギーを死神が見逃すはずがなかったのである。

243.

スクナ、コタエ兄妹の長兄は第五王子の後見人である。彼の子息は現王のもとで日読みを司るオモイカネ。

コタエは現王の後のひとりだったし、なにしろ、タカミムスビの人間は王家とひじょうに深く関わっている。内紛もつぶさに目の当たりにしてきた。やれやれ、とスクナは思う。死神がつけ込む隙はいくらでもあったのだ。

(三つ子として生まれ、そんな己から三つ子が生まれたことを悩んだアマセオの気持ちが、生まれた三つ子を闇に葬ろうというシトリの気持ちがよーく、わかるわ)

三つ子は王位のしるしなのだ。第一王子の母モチ姫は三つ子の姉妹の長女だった。それゆえ彼女は生まれながらの王者として扱われたのだ。彼女の妹ハヤ姫も王の後のひとりで、三つ子の姫を生んでいる。自分たちが王家の人間であるという自負には強烈なものがあった。残念なことに彼女らの人となりは王者に見合うものではなかったが。

(私の清浄な心は醜い内紛に耐えられなかった。コタエもきっとそうだったのだろう。だから危険も顧みず他国へ飛んで行ってしまった)

カガセオという大きな荷物がいなくなったのでホシナ族の逃避行はぐんと速度があがった。

(もしや、ホシナ族を陥れたのはモチ姫か？ まあ、いまさら詮索したところで始まらんが。ただ、彼女たちのすることには特徴がある。道理がないことだ)

ミツハは、オモイカネは敵ではないと言った。泣き虫で怖がり屋だった甥っ子を、おまえは信じられるのか、スクナよ

*

アラフネ山のふもとの川が、七日間、血に染まったという言い伝えが地元に残っている。武器を持った数千人が激突し、川が染まるほど多くの血が流れたのだと。

戦闘そのものは一日でかたがついた。矢が飛び交い、剣が撃ち交わされた果てに、アマセオとフツヌシは最初の時と同じ場所で、どちらも血にまみれて、見合っていた。

244.

「降伏せよ」ぜいぜいとあえぎながらフツヌシは言った。「できぬ」アマセオもあえぎながらそう応じた。戦士はそれぞれ百名も残っていない。精も根も尽き果て立っている

こともできないが、彼らの目にはまだ闘志が燃えていた。

フツヌシは声を張った。「ホシナの郷は我々の軍が占拠し、住民は捕らえた！ 降伏せよアマセオ！ さすれば住民の命は助ける！」

「占拠し、住民は捕らえただと？ ならばその証拠を見せよ！」

「あれを見よ」

フツヌシの指さす方向には、晴れた空に立ち上る黒い煙。ホシナの郷があった方角だ。

「あれが証拠だということか。いったい何の証拠か」ホシナの郷のことはよく知っている。燃えるものといったら、動物の革の天幕くらいだ。そんなものは簡単に移動できる。ホシナたちが捕まるまでぐずぐずしていたとは思えなかった。

「信じるも信じないも、おぬしの勝手。しかし間もなくここへ政府からの援軍と使いが来る。おぬしらは逆賊としてしょっ引かれるだけのこと」

「……………」

「まあ座れ。それまで待とう。少々、疲れたわ」

アマセオは味方の戦士たちを振り向き、言った。「みな、休め。余力のある者はけが人をみてやってくれ」しかしアマセオだけは立っていた。フツヌシには援軍が来るかもしれないが、ヤサカオ軍はもはや全力を使い果たしていた。それでも膝を折ってはならない、そう心にささやくものがあつた。

フツヌシの援軍として送り込まれたのはミカヅチである。

実は、フツヌシのは様子見としての軍だった。討伐の相手は石器づくりを生業としている。武器は持っているかもしれないがそれを使う対象は獣であつたし、人間相手に使ってはならないことは王との契約に盛り込まれていた。ならば本隊を投入する必要はないという判断だったのだ。かといって、フツヌシ軍が本隊より劣っていたわけではな

いということ、彼らの名誉のために書き添えておこう。

245.

戦況を伝える使者がヤサカオの元へ走った。族長を囲み、女たち、子供たち、老人たちは息をのみ、手を取り合う。彼らは聴いた。一族の男たちの猛々しさと、アマセオの猛将ぶりを。戦うことは、勝敗に関係なく、武人一族である彼らの誇りであり、存在理由であると、最高齢の女がつぶやくと、みなが頭をうなずかせた。

それを見て、ヤサカオは言う。「俺は、族長を降りようと思う」

一同の驚きの目の中で彼は、にっ、と笑った。「我らの長は、アマセオだ」

*

血の気の多い男が激情の雰囲気の中ですることだからどこまで本気かわかったものではないが、それでもその言葉は重い。そうつぶやくのは、オモイカネである。なぜなら……ヤサカオにそう言わしめたのはタカミムスビー門の若者だったから。そしてその若者は人だけでなく、目に見える獣、見えないモノ、植物、天候までも味方につけていた。

*

大勢の足音と気配が戦場へ向かってくるのがわかる。フツヌシのいう援軍だ。

(今さら、何を恐れようか) アマセオの心は穏やかで、同時に意志は固かった。自分は戦うために生まれてきたのだという気持ちが自然に沸いてくる。俺は不条理な世界に異を唱える。生きるために戦うのだ。

246.

ミカツチの行軍の最後尾で、悠々と馬の背に身を預けているのはタマシギである。

馬鹿なやつだ、と彼は独り言ちる。アマセオひとりが投降すれば済んだものを。我を張って抵抗したために政府の正規軍が出動するなどという、おおごとになってしまった。ということは、すでに大勢の死傷者がでているはずだが、タマシギの心はそういうことには冷淡だった。

(俺はあの時おのれが何者か知った……)

『あの時』の光景をまざまざと思い出すことができる。彼の父ハマツが悩みに悩んでついに果たせなかった仕事を、タマシギは代行した。主君の子を殺めたのだ。相手が抵抗もできない赤子とはいえ、己の手で命を絶つという、一線を越える行為は、タマシギに何をもたらしたか。その行為のおかげでハマツは主君から陰ながら多大な支援を受けられる約束もかわされていたのだが、それはさておき。他者の生死を手中にする万能感。一言で言えば、快感だった。彼は罪悪感ひとつ感じる事がなかったのだ。そのことに、彼は少しばかり驚き、そして大いに得心した。(俺はこういう人間だったのだ)

そうだよ、と、誰かがささやく

それでいいのだよ。それこそがキミなのだ。それがキミの本質というものなのだ。さあ本質を生きるのだ

キミらしい人生を生きるのだ

ふふふふ……

生暖かい風のような笑い声が耳元で踊り、彼自身の喉からも笑いが漏れ出る。

ふふふふ……ふ……ふはは……ははははは！

彼は笑った。勝ち誇ったように。彼の心中にはもはやシトリの主君も一族の命運も見当たらない。数知れない生死を操り、時の政府軍をさえ操る。それこそが、俺だ！ なんとという快感、なんとという心地よさ！ まるで天に昇り、空を駆けるようだ！！ これが俺だ！！

247.

タマシギが想念の中で天まで舞い上がっていたとき、政府軍の将、ミカヅチはおのれの目を疑っていた。

アラフネ山の広大な山頂の平原、死傷者が累々と倒れ重なる中、ただひとり超然と佇む者。二本の脚で立っているのはその者だけだ。ほかの者は一人残らず、地面に膝をついたり手を突いたりして体を支えている。立っている男は血にまみれているものの、面は平然としていた。

ミカヅチの目には、すべて、この男の仕業のように映った。

(なんとということか！ カトリのフツヌシともあろう者がこの男に屈したというのか！！)

フツヌシは「疲れた」と言って自分から膝を折ったのだったが、ミカヅチはそんなことを知る由もない。彼は名門カトリのフツヌシを追い詰めた若い男に戦慄した。

状況を見渡した目を改めてその男に移せば——目の錯覚か——青とも紫とも緑ともつ

かぬ透明な影が極光のように揺らめいて男の全身を覆っていた。それはおそろしく――美しい眺めだった。

ミカツチはごくりと喉を鳴らした。この男が罪人の告発を受けているシトリのアマセオなのだろうが、ミカツチの中で拒絶するものがあった。それでかすれた声で問うた。

「そなたは？」

男は応じた。「私はアマノカガセオ」その声は二つの音が微妙にずれ、また、重なっていた。二人の人間が同時にしゃべっているかのように。

ミカツチは太い眉をひそめて繰り返した、「アマノカガセオ？」聞いたことのない名だ。

「カシマのミカツチどのだな？」

「いかにも」

「フツヌシどのが追っていた者、シトリのアマセオという男は、もうおらぬ」

「戦闘中に死んだという意味か？」

アマノカガセオと名乗る男はただうなずいた。フツヌシは、と見れば魅入られたような目でその男を見上げている。

「ミカツチどの、アマセオひとりのために何故このような大軍が必要なのか。なにか理由があるのか、お聴きしたいところだが」

ミカツチはフツヌシと目を見交わした。

その時。

248.

「その話。待たれよ」

新たに横から割り込んできた男に、アマノカガセオは目だけ向けて言った。「私はアマセオという男ひとりのために。政府が何故……カトリのフツヌシどの、カシマのミカヅチどのを用いるという、このようにきわめて大掛かりな対応をされるのか、その理由を知りたいのだ」

アマノカガセオはどこか人間離れしていた。物質的な圧迫感を感じる。それは間違いなく、彼がまとう青紫緑の極光が放つものだった。

割り込んできた男、オモイカネは思った。（これは何者だ——）

「あるいはこう問おうか、オモイカネどの、ホシナ族はこのような仕打ちを受けねばならない、いったいどんな過誤を犯したというのか。フツヌシどのの先刻アマセオにこう言われた。『ホシナの郷は軍が占拠し、住民は捕らえた。故に、降伏せよ』と。これは軍による犯罪ではないか。どのような理由でこのようなことが許されるのか、説明してほしい」

「それは」オモイカネは口を開こうとし、ふと空を見上げ、あっ、と驚愕の声をあげ、手をあげて空を指さした。「あれはなんだ!？」

スクナが見ていたら「下手な芝居はよせ」と言ったにちがいない。オモイカネの動作のタイミングは、話題を逸らせたい、あるいは、発せられた質問に答えたくないがための、滑稽な芝居にみえるものだった。しかし、地面から上を見上げていたフツヌシの目にもそれは飛び込んできた。

宙に浮かぶ真っ黒なモノ。巨大な鳥。カラスだ。ワシなどの猛禽類よりも二回りも三回りも大きい。

羽ばたくでもなく、滑空するでもなく、空に貼りつくように、それは浮かんでいる。その異様な印象は、身動きひとつせずその場で停止しているだけでなく、後ろを振り

返るように首を捻じ曲げているからだ。そう、呼び止められて、つい、背後を振り返ってしまったような具合に。

249.

アマセオが自信満々に生まれ変わったような姿をみせ、王の重鎮であるオモイカネを詰問し始めた時、カラスは瞬時に、まずいことになった、と直感した。なんといってもカラスは、光り輝くものが苦手である以上に、オモイカネのような正真正銘、頭の切れる人間は大の苦手だったのだ。そして即座にタマシギをその場に放り出して逃げだしたのだった。まったく彼は、機を見て敏であること、この上なかった。しかし、完全に逃げ出そうという気はなかった。せつかく面白いことになって来たのだから、様子を見て舞い戻ってくるつもりだった。

ところが。

「お待ちなさい」

すぐ背後から声をかけられたものだから、カラスはうっかり振り向いた。そして声の主を見て愕然とした。そこで羽ばたくのも滑空するのも忘れてその場で凍りついてしまったのである。

アマセオは思わず叫んだ。「ミツハさんではないか！！」

カガセオも叫んだ。「いかん！ そいつに手を出してはならん！！」別々に叫びながら地を蹴っていた。カラスとミツハが対峙している、宙の一面へと。

茜色の簡素な衣の裾が風にあおられてゆっくりとひるがえっている。ミツハはアマノカガセオも、彼の後を追ってきたオモイカネも、気に留めなかった。

「お待ちなさい」と彼女は言った。「せっかくこのようなところで会えたのです。積もる話でもいたしませんか」

カラスは答えない。いや、答えることができない。口を開くことも羽ばたくこともできない。完全に動きを封じられてしまっていたのだ。

アマノカガセオは独り言のようにつぶやいた。「こやつは知り合いなのか、ミツハさん」

ミツハはわずかにうなずき、カラスに向かって言った。

「聴きなさい。ベネトナシュ。疾く、この地を去りなさい。そして二度と戻ってきてはならない。この地に入ることは、私が許しません」

ベネトナシュと呼ばれたカラスは横目でミツハを見ながらぶるぶると体を震わせ脂汗を滴らせていた。人間ならば蒼白になっているといったところだ。

「なにか言いたいことがあるなら、なんなりと言うがよい」

ほんのわずか、口がきける程度に束縛の術が緩んだのを、機敏なカラスは見逃さなかった。思いきり羽ばたいたかと思うと、次の瞬間には空のかなたで黒い点になっていた。

*

「ミツハよ、そなた、何者なのだ」

「ス、スクナおじ上！？ どこから湧いてでたんですか！？」

「いやなに、戦況を見に来ただけだが。まさかこんな場面に出くわそうとは」

「スクナさま。わたしは何者でもありません。ただこの地を愛し、人々を愛する者です」

「ミツハさん、今のやつを逃がしてしまってもいいの？」

「ええ、逃げて行った先はわかりますから。それより、アマノカガセオさま……」

250.

ミツハ、アマノカガセオ、そしてスクナとオモイカネはアラフネ山の上空に留まって夜空を見ていた。晴れた空に輝く北極星を。

*

天の北極に最も近い明るい星を北極星という。

地球の歳差運動により天の北極が移動するため、北極星の役割をする星も交代していく。現在（西暦二千年代）の北極星はこぐま座 α 星、将来はケフェウス座 γ 星 → ケフェウス座 β 星 → ケフェウス座 α 星 → はくちょう座 α 星 → はくちょう座 δ 星 → こと座 α 星、という具合に、ほぼ二千年ごとに移動していく。『北極星の役割をする星』は円弧に沿って移動し、二万五千八百年ほどかけて一周する。

Salamander inの時代に遡ってみると、このころの北極星はケフェウス座β星の辺りにあたるのだが……

この時期、この円弧上の線をはさみ、ほぼ等距離に離れ、ほぼ同じ光度のふたつの恒星がある。それがケフェウス座のβ星（アルフィルク）と、ケフェウス座ι星（アルヴァヘト）である。

*

「王の左の大臣である私が口にするのも憚られることだが、今、王家は揺れに揺れている。王の後継者を巡って、陰謀が後を絶たぬのだ。宮廷内、政府内部、あちこちで派閥が生まれ、目に見えぬ対立が生じている。ホシナ族が陥れられたのもその一端である。アマノカガセオよ、そなたは尋ねた。ホシナ族はどのような過誤を犯したのかと。答えは、なにも、だ」

「では——いったい何故——」

「王の直轄地で、王と密接な関わりのある者が不祥事を犯せば、王の権威が揺らぐ。焦点はホシナ族ではなく、王なのだ。王に対する、手の込んだ嫌がらせなのだ。すまぬが、誰の、という質問には答えられない。私から言えることは、ホシナ族にはなんの非もない。利用されたのだ、ということだけだ。そしてそこに、そなた、アマノカガセオが現れた。王位に関わる者にとって、これ以上厄介な者はいない」

「どうということですか、私はたしかに三つ子として生まれ、わが子に三つ子を持った。しかし、王位を要求しようと考えたことなど一度もない！」

「アマノカガセオよ、私のような天文を観る者にとって、今、『円弧上の線をはさみ、ほぼ等距離に離れ、ほぼ同じ光度のふたつの恒星』が存在する。そのひとつが、そなただ」

「そんな――」

「此度の戦いにこの地の動物、植物、天候までもがそなたらに味方した。だからフツヌシの政府軍を負かすことができた。現に、ヤサカオは族長を降りると言っている。長はそなただと。これは由々しきことだ。この地に生きる者の多くが、王はアマノカガセオだと考えているということだ」

「それは――たしかに私はこの地が好きだ、だが――」

オモイカネはつぶやくように続けた。そなたはここにいる限り命を狙われる。そなただけではない、そなたに縁のある者すべてに影響が、よからぬ影響が及ぶだろう。

スクナは口には出さずとも考えていた。オモイカネよ、と。それはタカミムスビー門のことだよな。

251.

夜の間歩きに歩いたホシナ族は、日が昇ると深い山間の洞窟に身を潜め、眠った。この先どうなるという不安はあったが、彼らは身軽だったし自然の中で生きていく技術は十分すぎるほど持っていたから、むしろ、新天地に向かう希望の方が勝っていた。

日が中天を過ぎ、西に傾いたころ。

ホシナは誰かに呼ばれたような気がして洞窟の外へ出た。日没後の出発に備え、ほとんどの者は眠っていた。

洞窟を出て、山の中腹まで登ると視界が開けた。眼下は湖、遠い対岸に山並みがかすんでいる。眩しい光に彼は思わず目を細めた。日没を迎えて夕日が湖面を橙色にきらめかせている。彼はこぶしで目をぬぐった。我ながら柄でもない苦笑いする。美しい光景を目にしたからだろう、鼻の奥がつんとして涙を催したのだった。

ホシナよ

誰かがそう言ったのか、はたまた空耳か

ホシナよ。ホシナ族の人々よ。

そういわれてふと振り返ると、一族の者たちがあとをついてきていた。ホシナは狐につままれた思いで目をこすった。空中に誰かいる。

人だ。すぐその、空中に。「——お——」

私の力が足りぬばかりに、そなたらを追い詰めてしまった。すまない。

「な！ なにを仰せられますか！！」

が、ホシナ族よ、さすがだ、よくぞここへ来た

「はあ」

ここは私の港だ

「港？」

ゆるやかな身のこなしで、王は湖面を指さした。湖面に波が立ち、みるみるふたつに割れた。ますます橙色にきらめく光の中に、湖底から何か、大きなものがせりあがってきた。水を押しのけ、宙に浮かび上がってくる——！！

みなの中から驚きの声もれ、つぶやきのひとつひとつがやがてひとつになった。
船だ！！

私の船だ。私にはこんなことくらいしか、してやれぬ。この船で望む土地を目指すがよい。そなたらの星が導くままに。今までよく働いてくれた。感謝する。
さあ、行け。

さらば。ホシナ族。

さらばだ。天津甕星。

第十五章 『ふたつの北極星』

第十六章へ続く

第十五章のあとがき

第三部 第十一章から五つの章に渡った古代日本編。

タカミムスビ族の一派で、織物を司る倭文（しとり）一族に生まれ、なぜかフツヌシやタケミカヅチという大丈夫たちと対決した、アマノセオともカガセオとも、天津甕星ともいわれる人物。

以下、昨年ブログに載せましたが、時間が経ってしまったんで、おさらい。（最後に系図をふたつ…もっと省略できそうですが、作り直すのが手間でした；…載せました。）

古代史上では、名前がでてくるのは日本書紀、先代旧事本紀、ホツマツタエ。

日本書紀、先代旧事本紀ではどちらの話も、フツヌシとタケミカヅチが『アメノカガセオというわるい神がいるのでこれを討つ』と言って出かけて行きますが、なぜか途中でタケミナカタの話になってしまってます。ホツマツタエではなにも触れてません。

茨城県那珂市静にある静神社（しずじんじゃ）。

主祭神：建葉槌命

配祀（神社の主祭神にそえて、その神と縁故のある他の神をまつ）：手力雄命 高皇産靈命 思兼命

「静」は、倭文（しづり、しどり）からの転訛とされ、建葉槌命（タケハヅチ）は織物の神様。日本書紀によると、建葉槌命は、星神・香香背男（カガセオ）を征服した神である、といます。

配祀の手力雄命（タチカラヲ）と思兼命（オモイカネ）に共通するものといったら、彼らは『日夜見』、暦を司る者、気象学者で天文学者なのです。ホツマツタエではこの二人ともう一人アメフタエ（ムラクモから改名）までが日夜見として明記されています。

日夜見すなわち陰陽師。有名なのが安倍晴明の安倍氏、また、加茂氏、弓削氏、芦屋氏。ならば陰陽師の方から祖先を辿ってみる。するとですね。弓削氏の祖先がアメヒワシなのです。ほかの三氏はうまく遡れない。

アメフタエの次から日夜見が不明。もう推測か妄想かという話ですが、主祭神：建葉槌命の静神社は、タケハヅチが日夜見を継いだということでしょうか。ならば、星神・アメノカガセオを征したことと無関係ではなさそうです。

さらには、タケハヅチの兄弟なのか別名なのか、ナガシラハ（長白羽神）、あるいは、アメノシラハ（天白羽神）という人がいて、謎の多い天白信仰のもとになったのではないかと思われるのですが…

アメヒワシ（アメノカガセオの子でタケハヅチの父）が祭神となっている鷲神社はお酉（とり）さまと呼ばれて今も親しまれ、生活の中に深く根を下ろしている。どういうわけか、古くから一般の人たちに愛され、敬われた存在なのです。

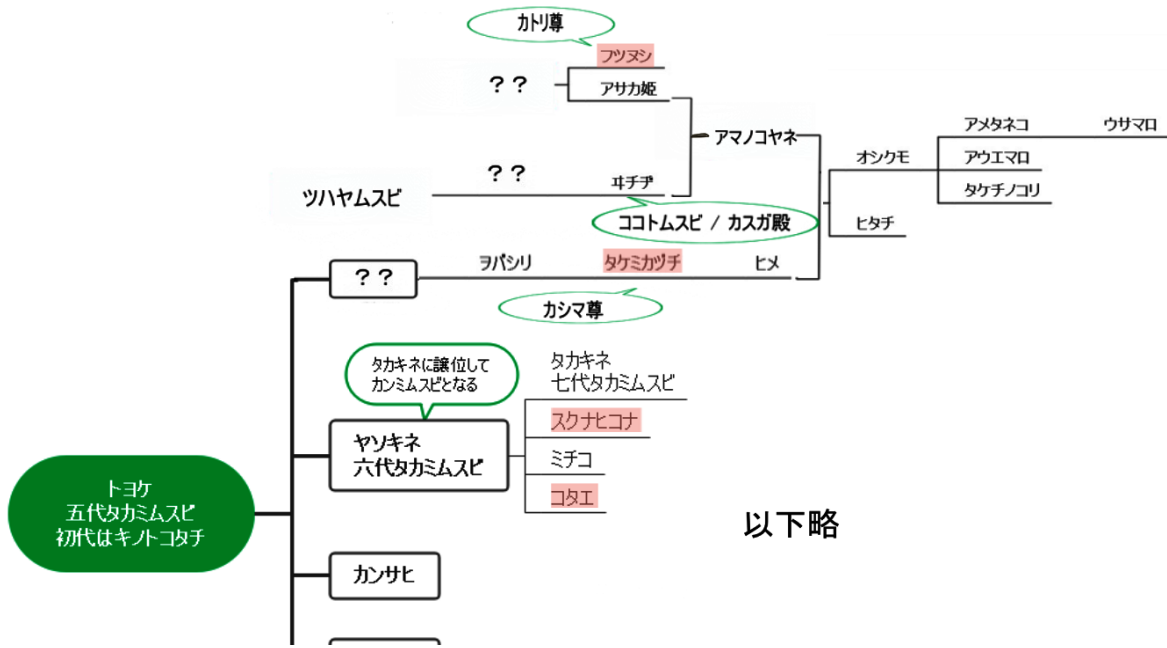
もう、複雑怪奇で謎だらけ、これらをぜんぶ盛り込むのはさすがに諦めましたけれども（ムリ）、そんなところを表現できていればいいのですが。

第一王子の母モチ姫の実家は『イヅモ』となる以前の中国地方を治めていた高位の豪族、というか皇族のひとつで、イサナギはここ出身。モチ姫自身相当力を持っていて、実家のある地方の行政に食い込んで私物化していたといいます。
こんな時代からそんなことしてたんだ。

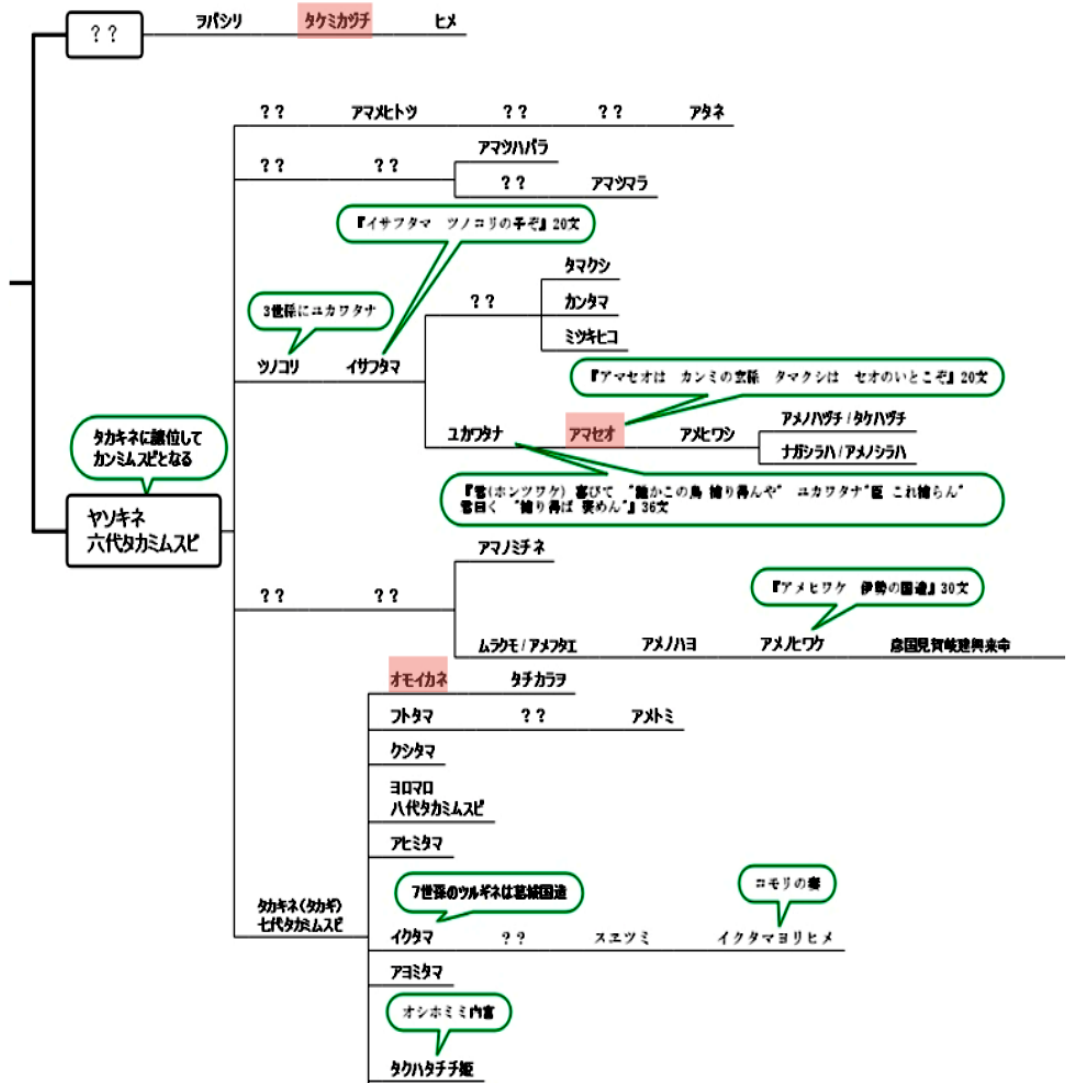
系譜-2の一番下にいらっしゃるタクハタチチ姫という人は第五王子（皇太子オシホミミ）の正妃です。オモイカネとは兄妹の関係です。

さて、ミツハとヒューダーには接点がありません。
ミツハの思いがかなうのは、遥かに遥かに後の世……『nanako-fifteen』にて。どんな形でめぐり合っても、どんなに惹かれ合っても、決して交わらない道を歩むふたりなのです。

2023年3月5日 記



系譜-1



奥付

Salamander in the circle

第十五章 ふたつの北極星

2023年3月10日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

ブログ [世界の果ての島より](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#)

[「neo-himeism」](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
